

「文庫書き下ろし児童書」

——その概観と近況——

榎本 秋

本稿ではフォア文庫、青い鳥文庫、ポプラポケット文庫、カラフル文庫、そして創刊したばかりの角川つばさ文庫といった新書スタイル（実際の版型は新書）の児童書のうち、再刊や翻訳などをのぞく書き下ろし作品を「文庫書き下ろし児童書」と呼称し、その概観と近況を紹介する。

この分野の作品はフォア文庫（七十九年創刊）と青い鳥文庫（八〇年創刊）という二つの長い歴史をもつレーベルで次第に数を増やしていき、現在ではハードカバーよりも手軽で、子どものお小遣いでも気軽に買えるスタイルがすっかり受け入れられている。

特に福永令三「クレヨン王国」シリーズは、ハードカバーで刊行されていた第一作目が青い鳥文庫より刊行される

と人気を集めるようになり、やがて文庫書き下ろしでのシリーズ展開が近年まで続く大ヒット作品となった。

さらに近年ではライトノベル（中高生をメインターゲットとし、アニメ・マンガ調のイラストや文庫スタイルを主な特徴とする娯楽小説群）との接近が目目されており、エンターテインメント性の高いストーリーや、アニメ・マンガ調のイラストといった、ライトノベル的な特徴も多数見受けられるようになった。

特に後者は書店に並んでいるカバーの主流が水彩調の幻想的なイラストからアニメ風のキャッチーなイラストへ少なからず変わっていることが実感でき、時代の流れというものをもまざまざと感じさせられる。ライトノベルと書き下ろし文庫児童小説の両方でイラストを手掛けているイラストレーターが非常に多いことも特筆すべきだろう。

また、青い鳥文庫で月五冊、角川つばさ文庫で月四冊など、児童書としては非常に多数の刊行ペースを有していることも、この分野の特徴と言えるだろう。

そんな中で〇九年最大のトピックとなったのが、先述した角川つばさ文庫の創刊である。角川書店により刊行されたこのレーベルは、既存のスタイルを継承しつつ、一方で角川グループの既存作品を多数投入している。

書き下ろし作品でないだけに少々本稿の意図からはずれるものの、谷川流「涼宮ハルヒ」シリーズ、宮部みゆき